

北海道現代俳句協会会報

第六十一号

令和七年十一月三十日発行

第三十六回総会開催

令和七年四月二十日
旭川市ときわ市民ホール

◇第三十六回総会

令和七年四月二十日（日）旭川市ときわ市民ホールにて開催。

出席者十五名。議案書に沿って議事進行。事務局の令和六年度の事業報告、会計報告、令和七年度の事業計画案併せて予算案の説明、出席者の賛成多数を以て承認。

役員の改選、会長、副会長の留任、監査役再任一名と新任一名承認、その他の幹事は会長から五名を指名。

新入会員よりも高齢で退会する会員が多く会員減少となる現状の打開案と協力を出席者に懇願。幹事を引き受ける人材、大会や吟行の実行委

員の不足が組織の先細りの懸念であることを訴え協力を願う。

◇第三十五回北海道現代俳句大会

令和七年四月二十日（日）総会終了後、旭川市ときわ市民ホール。当会員はもとより中北海道、南北海道、東北道の会員や会員外の協力があり大会を成功。

講演は講師 籙 朱子、中北海道現代俳句協会 銀化同人・雪華同人 演題「猿蓑ノート」

出席者二十八名（出句者六十三名）大会賞をはじめとする高得点の作品は次の通り

雁渡る星座のやうな廃線図

藤原ハルミ

流水の近づく醤油差しに鱈

村 一草

孤独よりひとりがすこしあたたかし

橋本 喜夫

冬星を睫毛にのせて逢いに来し

丹下 美井

地吹雪がテールランプへしがみつく

小山内 杏

マスターの磨くサイフ オン鳥渡る

風花 美絵

雪を掻き掻いては老いて日が暮れて

田中 徹男

講演記録

『猿蓑ノート』籙朱子を聴く

①興味を持ったのは初学の頃、芭蕉

一門に『七部集』があり『猿蓑』

を知る。また石田波郷が猿蓑研究

会を作り古典の句の発想法や表現

を学んだ事を知ったのが契機。

②『猿蓑』以前。京都の蕉門は少数

グループで旧来の俳諧と異なる

「風雅」（俳諧の意味）を説く為に

は「新しさ」を示す撰集が必要だ

った。

③出版と弟子たち。元禄四年七月三

日（一六九一年）『おくのほそ道』から二年余り後。編集者は向井去来と野沢凡兆、俳風の異なる二人を選び新風を探ろうとした芭蕉の意図。

④

（一）構成。乾（けん）坤（こん）の二

冊。乾は一から四巻の発句集（三

八二句）。坤五巻は連句、六巻は

芭蕉の俳文から成る。発句のみの

しかも冬夏秋春の配列は珍しい。

当時の撰集は一門の秀句を示す事

の他に現代の俳誌の役割も担い、

門人の指導にも使われていたと思

われる。『猿蓑』は読み易いテキスト

トであり蕉門の紹介誌でもあった

のでは。当時二匁五分、現在なら

ば約五千円の値段。

（二）序文は宝井其角、跋文は内藤丈

草、入門二年目の俳僧丈草を抜擢

した芭蕉の眼力。

（三）序文の後の巻頭は芭蕉の句

初しぐれ猿も小蓑をほしげなり

題名の由来を其角が序文で、巻頭

の一句に撰集の全体の意図と性格

が表示されていると説く。其角以

下時雨の句が十二句、籙さんの

「様々なしぐれの情景が浮かび雨

音が響き渡るようだ。」の一文に冴

えた叙情を覚えた。

⑤ 魅力。

(一) 連句中心の世に在り発句中心は前例がない。連句のルールは複雑で後世廃れていくと予想し発句中心にという芭蕉の着眼点。

(二) 章立てが冬から始まる配列は異例で撰集の巻頭を芭蕉の発句から始めたかったという理由。最後は

行春を近江の人とおしみける

の句で、芭蕉の中で初めと最後の句だけは決まっていたのではないかと言う。

(三) 『猿蓑』は芭蕉の敬愛した西行の『山家集』へのオマージュ。「春としもなほ思はれぬ心かな 雨降る年のここのちのみして」という一首で始まる『山家集』。
『猿蓑』の出だしの雨は時雨好きの遙かな西行への敬意尊敬。

(四) 発句の多さは新参者の凡兆四十一句で別格の扱ひ、一番弟子の其角は二十五句、丈草は十二句。芭蕉が四十句で全体の色調を芭蕉と凡兆が決めている。

(五) 七部集の五番目に位置する『猿蓑』は芭蕉にとつて時々の俳句理念を形にする撰集。『おくのほそ道』以後「不易流行」「かるみ」を表現

できる作者を求め編集も委ねた。
(六) 王朝和歌の中心主題「恋」を俳諧化した句も。
うらやましおもひ切時猫の恋
越人

(七) 一門の作句方法。初五(上五)をどう置くかを重視。初めに七五を作り冠(当時の俳諧用語で上五の呼称)を何通りか考え(冠をさがし)表現が秀れていけば季語を変えても可。事実よりも一句の詩としての純度が大事。

(八) 芭蕉の中の『猿蓑』の位置付け。芭蕉の発句四十句には名句が多い。わずか八年間に六冊の撰集を編み、その都度に新風を求めていく。一門の秀句を集め版木を彫り一、二年で撰集を編む芭蕉の活動は「無常迅速」そのものを生きた、と籬さんは熱を込めた。

⑥ 『猿蓑』以降の蕉門。凡兆と丈草を世に出し「かるみ」を弟子各々が求めていったが、十分に把握していたとは言い難い。

上行と下くる雲や秋の天 凡兆
水底を見て来たかほの小嶋かな 丈草

⑦ 後世に与えた影響。先ず、河東碧

梧桐が猿蓑俳句の全釈書『俳句評釈』を出す。

(一) 内藤鳴雪(ホトトギスの重鎮)正岡子規が凡兆を高く評価、純客観派の本尊として崇めた。

(二) 芥川龍之介が丈草を推す。丈草を「これらの句はただ寂びと侘びと言うばかりではなく一句一句変化に富んでいることは作家たる力量を示すもの」と評した。籬さんは殊に⑦の後世に与えた影響、ホトトギス、芥川、波郷も『猿蓑』を学び現在に至る点が重要であり、芭蕉の撰集を編むプロデューサーとしての企画力、眼力は時代のすぐ近くまで来ていたと締め括る。最後に籬さんが芭蕉凡兆蕪村(国宝・夜色楼台図)のマリアージュであるとする一句。上五(冠)は芭蕉が決めている。

下京や雪つむ上の夜の雨 凡兆
『猿蓑』の話を伺う貴重な機会を戴き感謝を申し上げますと共に、今後益々の御活躍を祈念致します。

(村 一草記)



○第三十四回北海道現代俳句大会
(東北北海道現代俳句協会主催)
令和七年六月八日(日) 釧路市、
北海道現代俳句協会会員の入賞作品は

木の根明く仔牛の耳にはや名札
三国 眞澄

人の輪の中がふるさと蓬餅
西川 良子

当日、北海道の四地区(中・南・東・北)の会会長事務局長会議を持った。大会開始前の短時間ではあったが、厳しい現状とそれぞれの地区においての会員増加を進める活動や計画など貴重な意見交換が交わされた。

○第三十五回北海道現代俳句大会は、令和八年六月十四日(日)旭川トヨーホテルにおいて北海道現代俳句協会評議員の家藤正人さんをお招きします。皆様のご支援で盛大な大会を開催しましょう。
詳しくは大会要領と出句用紙をご参照ください。

二〇二五年 於・増毛町元陣屋
北北海道現代俳句協会・雪華同人会共催

秋の増毛吟行・句会を終えて

雪華同人会 青山 醉鳴

二〇二五年九月二十八日(日)、二〇二四年秋の北彩都吟行句会に続いて、北北海道現代俳句協会・雪華同人会の吟行・句会を共催しました。

吟行先は増毛。前回の増毛吟行は二〇一七年九月十七日の開催でしたから八年ぶりとなります。わたしは当時、雪華に入ってから一年ほど経った頃。葦牙をはじめとする北現俳のみなさんがたくさん参加されました。今回も早朝の集合のため、旭川以外からの参加者が限られてしまったようですが、それでも総勢二十八名の参加となり、貸切バスにした甲斐がありました。

晴天に恵まれて走る道すがら、夏の暑さも嘘のように、山々はうつすらと紅葉が始まっています。前回の経路をベースに、まずは留萌の道の駅までまっすぐ赴き、休憩と買い物などを。次に向かったのは前回は眺めただけの増毛小学校。案内のボランティアの方が増毛町や増毛小学

校の歴史などを説明してくださいました。幅広い廊下や運動場の木造トラスの規模の大きさ、ゆったりとした中庭の設えなどに練気隆盛の往時を偲び、当時は珍しかったグラウンドピアノや、御真影を掲げるために壇上背面に設置された建具付きのアルコーブなど、ひとつひとつに驚きの声を上げながら、廊下をぐるりとひとまわり。黒板の《ニシンの群れが来たので学校は休みです・群来休み》という板書を始め、人体模型やホルマリン漬けの標本など、古い小学校定番の品々や、開催中の黒板アートを眺め、昼の虫の声なども聴きながら句材の採集に各自励まれました。続いて暑寒別橋まで鮭の遡上の見学へ。橋を挟んで上流側は魚道に向かおうとするものや、ここで産卵させようと思っただけか川底を尾鰭で揺るがすものがあり、既にほっちゃんとなつた魚体も少なくありません。河口側では波に乗って新たな鮭の群れ

が入っては川面を波立たせています。海水から淡水へとからだを馴らすため、しばらくその場にいる一団はみな上流に頭を向けてぼぼ等間隔に並び、その背鰭は水の流れと見紛うばかりでした。

帰路を考えると時間に限りがあったため、今回は雪華の投句システムを用い、選句表の作成までを行いました。慣れない入力作業をみなさんにはお願ひし、おかげさまで少々駆け足ではありましたが、無事にスケジュール通り句会を運営することができましたことを深謝いたします。

また、当日即吟五句はたいへんだったと思いますが、どなたもご覧になったものをそれぞれに詠んでくださり、同じ句材、同じ時間を共有する喜びを得る良い機会となりました。

今回は地元の「秋の味まつり」と日程が被ってしまい、昼食をゆっくり摂れずたいへん残念でしたが、来年以降も継続して実りある吟行・句会を実施できることを、心より願っています。

(あおやま・すいめい 雪華)

句会報

青山 醉鳴

鮭遡上る背ナに集きしひとの背ナ
増毛は海より拓く秋まつり
海猫残る増毛食ふ寝る栖むところ

阿部 君江

老鮭の水に晒され餌になりぬ
消息を聞かぬ列車や秋の草
異国語のあまた聞こえて増毛秋

五十嵐秀彦

秋高やアップルパイの血糖値
鮭遡上カントータまたカントータ
鮭喰はれる凡愚の光ひるがへし

大村富美子

ひと時に手を振ることく芒かな
鮭のぼるDNAに逆らへず
木造の長き廊下や秋うらら

緒方 ちゑ

廃校のブリキのバケツ草の花
秋日和サップボードを風の海
遺伝子の地図を違はず鮭上がる

小山内 杏

閉校の玄関時計九時帰燕
鮭遡上力尽きたる順はなく
秋晴れの影持ち歩く味まつり

勝浦 恭子

サビ付きしトタン小屋あり番屋閉づ
御真影掲げし校舎群来休み
この海の何処に続く大夕焼



加藤ひろみ

秋晴れの野山をいくつ越えて海
鮭遡上見に庭のすさびを置いて
朝霧の街抜け出して海の町

風花 美絵

山裾にるるる軽トラのる素風
廃校の出口入口秋の蝶
覗きこむ錆びた欄干野紺菊

小池 澄子

天高くナナハンの名は隼なり
ひしめきて婚姻色の鮭のた打つ
新松子校舎に残る凸面鏡

小泉 晃治

完熟のりんご脈打つかもしれず
鉄道草架を飛ばせる廃線路
いわし雲尾を増毛連峰に置く

小根 麻里

浜守る白い鳥居や秋日影
うねる背うねる川面や鮭帰る
バス揺れるうつらうつらの照紅葉

佐々木 宏

秋風があり酒をころがす舌があり
コスモスものれんも増毛の匂いする
ちちろ鳴く木造校舎重たいぞ

佐々木 知枝

波際の眼球抜けしほつしやれよ
啄まれ追われ鮭にも生きる術
登り降り分ける白線秋校舎

十河 宣洋

鮭どもが水平線を越えてくる

とんぼ水平線を越えて飛ぶ
ぬつと出て右手は秋の水平線

秋の海力モメ鳴くほど濃ゆき藍
蔵人の手のすべらかに新走り
かつと口鮭今生の契りかな

中田 秀平

まなびやの外壁柱目なる秋気
山並へ遠近法の刈田並む
野紺菊ハートの形に固まれり

中塚 宏子

鮭釣りの竿多くして一人きり
海風にさやかに光る鮭日和
立ち上がる河口の波に鮭跳ねる

中村みずほ

國稀の藍染のれん水の秋
遠近に栄浜あり鱚雲
黒留に鳳凰舞ひて今年酒

奈良 伊世

鮭帰る母川の薫り辿りつつ
秋潮の平らかなりし雄冬岬
鮭の棹等間隔や増毛浜

西川 良子

白風やここ神様の通り道
器量よき林檎にはやきをよこの手
鱚雲利き手に磯の香の残る

橋本 喜夫

野紺菊昂る色のなかりけり
あきつばめ風待食堂にて会はむ
此事以外我に残るだろうか鮭

終 月子

鮭のぼるひなたに海猫の佇みぬ
蒼天の鷺に抜かるる刈田かな
生誕地不明流木秋麗

藤原ハルミ

冷やかや人体模型しるす過去
終はらない世界のやうな秋麗
秋の潮儀式のやうに真昼酒

増田 植歌

ほつちやれの鳥獣肥やしたる屍
たこザンギつまみ秋うららの増毛
秋濤は白く躊躇はずに尖る

三国 眞澄

秋潮や陣屋にかしぐ釣瓶竿
日本海へ迫り出す崖の枯れどぐい
三角の鱮伏せ廻る鼻曲り鮭

三谷なな子

軽トラの荷台の錆や鮭のぼる
赤腹の鮭は産み場所探しをり
草の穂や小学校へ抜ける道

村 一草

夜は星にあけ渡す空海猫帰る
秋波の穂の飛びかかる鯨蕎麦
日本海何色と問ふ小鳥かな

◇お知らせ

終 月子さんが作品集「風の葉」

をもって第四十回北海道新聞社俳句
賞本賞を受賞しました。おめでとう
ございます。



◇お願い

本年度の地区会費の納入をお願い
します。振込は北海道銀行神楽支店
普通預金 七一―〇六七三〇八五
北海道現代俳句協会 会計加藤
洋(宛) 現金その他で郵送をお願
いします。

◇編集後記

増毛町への吟行は会員以外の
方々の協力も得ながら無事に終わ
り、令和七年もあとわずかと
なり、令和七年もお元氣にお過ごし
ました皆様お元氣にお過ごし
ことと思ひます。

来年は四年に一度の北海道現代
俳句大会の当番です。作り溜めた
未発表の句、新作の句など沢山の
出句をお待ちします。大会の出席
をできない方も参加してください
ようお願いします。

令和七年十一月三十日 第六十一号

発行人 橋本 喜夫

発行所 北海道現代俳句協会

〒078 8345 旭川市東光五条六丁目

橋本喜夫方

電話(〇一六〇三四一四〇二五

印刷所 旭川市三条通四丁目右一号

株あいわプリント